

追憶

安達 正純

安達學剣道十段範士から学び得たもの、本来、大日本武徳会県支部の支部長は、県知事閣下か、県警本部長が当たる、ということを知っていました。

私の祖父安達保正は武専の（武道専門講習所）の第二期の卒業生に当たり、終戦後昭和四十年のはじめ頃、安達が岡山で生存しているとの情報から京都武徳会へ呼び戻され、岡山支部の結成へと進んできました。古武道の竹内藤十郎（分家）先生のご協力を得ながら作られたものです。

まだ当時は、パージ（公職追放）で定職はなく、今というフリーターのような生活を送っていました。その家族を支えるべく、祖母も父も母も大人全員が稼ぎに出ていったものです。

父はその様な環境から小さな私達に、働かざるもの喰うべからず！と厳しい態度で接しておりました。又その様な時代背景があった様になります。

祖父は元来、教育に係わっていた為に、「三つ子の魂しひ百まで！」

の仮に、保育園の設立を父の稼ぎ出した財を基に財団法人を興したものです。

これからの日本は、子供の教育にかかっていると、大きな期待と希望を求めていた様に思います。その祖父は、

「子孫に美田を残さず」といって、剣



道十段位を受領すべく、治療に病院に入りました。四月の天皇誕生日の武徳会の式典に合わせて、しかし、治療入院で肺炎をおこし五月下旬に帰らぬ人となりました。後を受けて、父學が替わりを務めました。今年八月三十一日急逝しました。

父は事業家として、武道家としての人への接し方は、正に八方美人的で己れに厳しく人には寛大である様に思いました。常に武道からヒントを得て、又、その直感力で進んでも退いても運の良い人間として長く信頼を得ていた様に思います。我々ではなかなか真似ることが出来ませんが数々の教訓を残してくれました。これを生かすも生かさな

一、よらば大樹の陰。

二、己れに喝、勝負に勝、事業に勝。

三、人より半足先に出よ。

四、動きは錨もとにあり。

五、働かざるもの喰うべからず。

六、己に厳しく人には寛大であれ。

七、この世で親とは仮の姿なり。

多々の教訓を残してくれましたが、全ての基礎根底にあるものは、剣道から得たものでした。又、先輩、先達より得た英知を実践活用したものです。

長きに亘り武徳会のスタッフ、会員の皆様方にご迷惑をかけたことと存じます。又、一方で愛されていたのかも知れません。

来るもの拒まず、去る者追わずの精神から多くのものを失い、又より多くのものを得たのだと思います。

今後の武徳会の一層の発展を願い、ご報告とさせて頂きます。

平成二十七年十二月